

沿岸底曳漁場調査図



底曳料漁場調査及集魚試験（第1次）

1. 明　開　百1954年8月14日 短所8月15日
2. 使　用　船　艇　大島丸 三の丸 6.5馬力
3. 調　査　員　当　員　外　3人
4. 調　査　所　有　宇　城　府　片　庄　五　時　（羽田港頭）
5. 調　査　器　具　① 使用電力2.6kw (3電線) 係、電線2.6m、1.5kg重1.0kg、3.5kg重1.0kg用鉛錘
料、探査の受取に付
6. 総　道　程　要　エドカタリ年8月14日16時40分出帆同日中坂海岸内チャニアが揚到着直に集魚灯を点灯して集魚状況を観察した其の結果ノイウツの若千表面に浮上來游したのを経受け次いで中層にアカムツの幼魚（タカサゴ属）が10～30斤程度の漁獲を認めたが短時間は浮上する傾向がなかつた。然し乍ら捕獲の際底

性は充分あつたが魚群が少なかつた為投網せず夜明前点滅して通過せしめた。水温24.5度、6月15日赤武門にて漁獲、当、前科場は水温24.5度で中間より10度低く日没後半より10度高くなる7月頃大半の「水スルル」が放魚した場合もみつて今回も予想通り放魚したのを確認したが升上せず中間以下で游行している上層海水が層つて帰り放魚は不明であつた。中層から表面近く迄は「ダルタマ」(鯛モ)の幼魚が40～70斤程度火に付き表面のシイラ(20斤立)を狙つて放流したのでシイラも減少する一方で増える傾向は見られなかつた。又「水スルル」の浮上せなかつた理由も「ダルタマ」に中間された為であろう。

第2次 調査

1. 時 間 自1958年6月25日 至同6月28日

2. 使用 網 管 前回同

3. 測 定 員 佐真、奥平

4. 測 定 位 置 第1回 長浜港外 第2回 久良波海岸

5. 測 定 装 備 前回同

6. 調 査 極 端

6月25日調査を完了して泊港を出港同日夕刻から翌日朝まで測定船の揚魚試験を実施日没後揚魚灯点灯5～10分後に表面にシイラの小群が現れ(主として真鱈(ミズン)とサクハ鮭が其の下層に約60～70斤程度の量)があり表面近くには、沖吐トウヅロ一様の集魚も若干認められた。23時頃火路航行始めたので投網して捕獲試験を実施しようとした所突然電線の調子悪くなり点滅した為魚群は逃散してしまつた。以後再び点灯して集魚状況を監察したが前回の半分以下の量となり投網する迄には至らなかつた。翌26日同位置にて再び曳網漁業車及魚種は前回と略々同様で若干「ダルタマ」も見受けられた。23時50分投網予前の時5分の相隔で延計約60斤程度捕獲23時迄岸受網内にて活魚販賣実施1時50分から1時50分迄約1時間に亘って活力状態を観察したが異常を認めなかつたので全個体を海面に放棄した。6月27日調査を久良波海岸にて実施して試験開始当日は日没から夜半迄にかけて真鱈(ミズン)、サクハ鮭等約40斤程度捕獲したが1時50分投網して捕獲試験を実施したが潮流が速く調成りが悪く其の上台風到来の先兆ともつて風速が次第に高まつて来たので操縦上実質を来たし各網を失敗して魚群を逃散させてしまった。その結果網を航行する予定の外海上要地が危しられた為操縦打切り那須港に向つた。

2. 海洋観測

月 日	時 刻	天候	気压	風向	風力	波浪	うねり	水色	気温	水温	比重	潮 流
6月25日	14-410	B 0	7	NEE	3	2	2	青	24.5	24.5	1.0254	赤武門
6月26日	13-455	B	4	NNE	2	3	1	4	24.0	24.0	1.0255	長浜港外
6月27日	9-15	B 0	4	E	3	2	1	4	24.0	24.0	1.0254	久良波海岸
	7日-50	B 0	3	E	3	1	1	4	24.5	24.0	1.0253	